J. Jpn. Soc. Soil Phys.
土壌の物理性
No. 128, p.47 ～ 48 (2014)

粘り強さと負けない心

落合　博之 [1]

大学生時代から漠然と研究者になりたいという目標はあったものの，英語力があまりにも低かったため，どうしていいものか悩んだ時期がある．修士に上がるとさらに英語に接する機会が増え，研究だけできれば良いわけではないということを実感させられた．そんな折に当時の担当教員で恩師でもある登尾浩助先生がカナダに半年間研究でいなくなることを告げられた．これは，チャンスと思い，修士 2 年の前期の大半をカナダで暮らすことに決めた．カナダに行っては見たものの英語が全く通じず午前中は英語学校に通い，午後は登尾先生の研究室で修士論文に向けデータの解析を行っていた．英語も少しずつ通じるようになり少し自信をつけて日本に帰ることとなった．

修士終了後，博士課程で選んだのはカナダであったが，ここで大きな挫折を味わうこととなる．アメリカをはじめ海外の大学は大学院を含めて授業料がべらぼうに高い．そのため奨学金制度を使って大学（大学院）に通う学生も少なくない．私もその一人であったが，ここでも英語の壁にぶつかり，結果として成績不振で奨学金がなくなり退学を余儀なくされる．退学が決まり，大学院に推薦していただいた登尾先生に退学する旨をカナダからの国際電話で伝えると，明治大学に移るので一緒に来ないかと誘っていただけた．この時は，完全なる挫折でかなりまいっていたので本当にうれしかったことを今でも鮮明に記憶している．日本に戻り，微小重力化下における水分・熱・溶質の移動に関する研究をカラム実験で始めたが，博士 2 年の時に私とほぼ同じ内容の研究成果がアメリカで発表されてしまい，研究テーマを一から考え直すことを余儀なくされた．新しいテーマを考えていた矢先に神奈川県農業技術センターとの共同研究の話が舞い込んできた．これは面白いと思い，新たなテーマを熱水土壌消毒時の土壌中の水分・溶質・熱の移動と変え，ひたすら研究に没頭する毎日となった．土壌物理学の分野でも珍しい熱水を用いた研究であったためパラメータの設定や現象に対する要因の追及に四苦八苦しながらどうにかこうにか博士論文をまとめたわけだが，この時の経験が今も役に立っている．この研究中特に感じたことがあったのでここで触れておこうと思う．「水田や畑で実験をするなら，まず農家の方々に話を聞け．」ということである．熱水土壌消毒の研究を行っている間に何度も農家の方と話す機会があり，その際に農家の方々が「なんとなく」で行っていた経験的なことが，正しいことが多かったからである．彼らの「なんとなく」は，決して曖昧なものではなく，生活のかかった状態の研ぎ澄まされた感覚により導き出された「なんとなく」であり，最新鋭のセンサーにも負けない毎日の経験という実績から導き出された「もの」なのである．この「なんとなく」のおかげでパラメータの設定が，短縮され，さらにいくつかの研究成果につながったことを付け加えておく（落合ら, 2009; 2011）．

博士後期課程を修了したのち，明治大学で特任研究員として 1 年間お世話になるが，その後，次の職が見つからず本当に困ったことを記憶している．この時は，学会の懇親会で諸先生方にポスドクのポストはないかと聞いて回ったほどである．結局，最終的には，全く違う分野の理学系研究科で特任研究員となれるのだが，学会時の職探しが結果として自分のアピールとなり，名前を諸先生方に覚えていただけたように思える．これにより，何が何でも研究者になってやるという気持ちが強くなり，私のターニングポイントであったのは間違いない．

東京大学大学院理学系研究科の特任研究員が決まったのは，年の明けた 2 月終わりになってからで，主な内容は，「海底土壌でのガス量の推定」であった（落合ら, 2013）．もともと，TDR 法を用いて高塩濃度の土壌水分量測定を行っていたので，方向性は簡単に決まった．この研究では様々な分野の研究者が同じ船に乗り，互いの研究をサポートしながらそれぞれの研究を進めていく．そのため，新たな発見ができ，研究に幅ができたのは言うまでもないが，分野の違いによって，実験の精度がここまで違うのかということも思い知らされた．セミナーでの発表では，これまで考えもしなかった質問が様々な研究者から出てきたことで，土壌物理について深く考える機会となった．全く異なる分野の研究に加わることで結果として土壌物理についてより深く考えることができたと思う．

現在は，北里大学で職を得ているが，ここまでの道の

[1] 北里大学
2014 年 9 月 30 日受稿　2014 年 10 月 1 日受理

りは，決して楽な一本道ではなく，様々な寄り道と挫折を繰り返してきたことは先に述べたとおりである．私がこれから研究者を目指す方々に言いたいことは，今後きっとどこかでぶち当たる大きな壁も粘り強さと強い心をもって乗り越えてもらいたいということである．可能性は無限大なのだから，若いうちは限界を自分で決めることなく頑張ってもらいたい．謙虚な気持ちと広い視野を持ち，すべての力を研究に注いでいれば，どこかに必ず突破口が開けるものであると私は考えている．最後にこのような機会を与えてくださった編集委員の方々並びに私をこれまで支えてくださった諸先輩方に深くお礼を申し上げ結びの言葉としたいと思う．

引用文献

落合博之・弘松峰雄・町山栄章・松本　良・登尾浩助 (2013): TDR 法を用いた深海での堆積物中の水分測定法. 石油技術業界誌, 77: 370–373.

落合博之・登尾浩助・北　宜裕・加藤高寛 (2009): 熱水土壌消毒時及びその後の土壌中における溶質動態. 土壌の物理性, 112: 9–12.

落合博之・登尾浩助・太田和宏・北浦健生・北　宜裕・加藤高寛 (2011): 熱水土壌消毒におけるサーモグラフィーを用いた地表面温度分布の評価. 土壌の物理性, 118: 13–17.